



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サイエンスコミュニケーションネットワーク横串会：組織や地域の垣根を越えたプラットフォームの試み
Author(s)	中澤，木聖；竹田，寛；立花，浩司 他
Citation	科学技術コミュニケーション， 5， 105-116
Issue Date	2009-03
DOI	https://doi.org/10.14943/34639
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36212
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC_no5_p105-116.pdf



報告

サイエンスコミュニケーションネットワーク横串会

～組織や地域の垣根を越えたプラットフォームの試み～

中澤木聖, 竹田寛, 立花浩司, 藤田剛, 畑谷成郎, 笠原勉, 松田健太郎

YOKOGUSHI NETWORK for Science Communication

NAKAZAWA Komina, TAKEDA Hiroshi, TACHIBANA Koji, FUJITA Tsuyoshi,
HATATANI Shigeo, KASAHARA Tsutomu and MATSUDA Kentaro

Keywords: science communication, network, cross-sectional, cross-regional, community

1. はじめに

本稿では、サイエンスコミュニケーションに関心を持つ人たちが気軽に交流できるプラットフォームとして立ち上げた、サイエンスコミュニケーションネットワーク横串会（以下、横串会）の設立と活動について紹介する。会を運営する側の視点から、設立に至る経緯、趣旨、実践する活動について述べ、その意義と課題、今後の展望について考察する。

2. 横串会の立上げ

2.1 背景

2.1.1サイエンスコミュニケーションの活発化と横つなぐの需要

科学技術振興調整費等で実施されている、サイエンスコミュニケーションに関わる人材育成を目的とした複数のプロジェクトでは、修了生を着実に輩出している。その結果、地域において有志間のつながりができ、新たなサイエンスカフェが立ち上げられるなど(朝野 2008)、サイエンスコミュニケーション活動の裾野は広がりつつある。同業者、または仲間が増えることで、各々の経験やノウハウ・課題の共有、情報交換などを相互に活かせるような厚みが、我が国のサイエンスコミュニケーション全体に具わってきたといえるだろう。このような中、石村らによって実施された研究機関の広報担当者間の「横のつながり」を支援するワークショップ(石村 2008)にみられるように、組織や地域等の枠組みを越えた横断的なネットワークへの期待やその重要性を指摘する声は少なくない¹⁾。

2009年1月10日受付 2009年1月30日受理

所 属：サイエンスコミュニケーションネットワーク横串会

連絡先：komina@yokogushi.sc

2.1.2 日常型の横つながりの場

分野横断的なサイエンスイベントのひとつである「サイエンスアゴラ」創設の目的として、各所での取組みやそれらに関与する個人など、様々な階層や関係における横の連携、連絡の場を形成するということが挙げられている（長神 2007）。こうした横のつながりのための場は様々な形で実施されているが、開催期間や会場が設定され、そこに参加者が集うという形式は「イベント型」交流の場と捉えることができるだろう。これに対し、日常的に他組織や他地域の仲間と交流ができる場、日ごろから互いの活動や情報に触れられるような、ゆるやかな横のつながりを中心にした交流の場を「日常型」の横断的ネットワークと位置づけることができる。横串会は、この「日常型横つながりの場」をつくろうと、様々な所属や背景の有志が集まり、始めた試みである²⁾。

2.2 設立に至るまでの経緯

横串会は、2007年度の北海道大学 科学技術コミュニケーター養成ユニット（以下、CoSTEP）の受講生である中澤木聖（現 横串会代表）のCoSTEP受講生のソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS）内での「サイエンスコミュニケーション交流組織」結成の呼びかけから始まった。同時に、CoSTEP以外のサイエンスコミュニケーション活動に関与している関係者への呼びかけも行われ、これらの呼びかけに賛同したメンバーを中心とした、サイエンスコミュニケーション交流組織の立ち上げ検討メンバーリスト（以下、立ち上げ検討ML）が2008年1月に開設された。

この立ち上げ検討MLにおいては、最初に各メンバーのサイエンスコミュニケーションへの関心や問題意識等を、ざくばらんに出しあった。これは、メンバー間での自由な個人意見を交換することが目的であった。

その後、交流組織の目的確認、会員募集とインターネット活用の手段等についての意見交換と合意形成が行われていった。この間、立ち上げ検討メンバーでもあった立花浩司（現 横串会副代表）により、この交流組織の立ち上げの進捗状況や目的に関しての紹介と呼びかけが行われた（立花 2008）。

2008年6月1日、北海道、関西、関東在住の交流組織立ち上げ検討メンバーが東京に集まり、正式名称の決定、活動内容の確認、事務局やサーバーの設置等についての最終的な意見交換・合意形成が行われ、現「横串会」の体制が確立され、正式な発足となった。

会の正式名称については、「サイエンスコミュニケーションネットワーク横串会」と決定し、会のロゴマークを作成した（図1）。

その後、6月23日に運営委員会（現在、16名）が発足し、立ち上げ検討MLは、その役目を終えて解散した。8月5日に会員募集活動を正式に開始、広報・対外発信用のウェブサイト「横串会WEB」³⁾を開設、横串会会員間の交流ツールとして「横串会SNS」⁴⁾の運用が開始された。（2009年1月10日現在 会員数：104名）



図1 横串会のロゴマーク

2.3 横串会とは

2.3.1 横串会がめざすこと

横串会の活動理念は、サイエンスコミュニケーションに関心を持つさまざまな人たちが、お互いにゆるくつながることのできる「場」を創出することである。会員が気軽にフラットな立場で交流し活動することができる、開かれた「創発的ネットワーク」の場をめざしている。横串会のネットワークを通じ、多様な経歴を持った人たちが地域的な隔たりや時間的な制約、活動分野、所属組織などの枠組みを超えて、新しい連携体制を築くことが可能となる。このことにより、既存の枠組みにとらわれない、柔軟性の高いサイエンスコミュニケーション活動が生まれることを期待している。

横串会の大きな柱は「ゆるくつながる」ということにある。「ゆるくつながる」とは、参加者各人の自由意志に基づく、柔軟性に富んだ、お互いに無理をしない関係をつくることを意味する。ポイントは、あくまでも個人の自主性であり、自由意志によって会員間にゆるやかなネットワークが構築されることにある。

また、気軽にフラットな立場で交流し、活動できるということも、横串会の持つ、もうひとつの大きな柱であると考えている。これにより、会員個々のサイエンスコミュニケーション活動への取り組み方そのものにも自由度がうまれる。例えば、業務都合や家事等の理由によって、決められた時間の範囲内での活動への関与が物理的に困難な人たちに対する参加のハードルを下げる、という効果が期待できる。横串会では、活動の主体はあくまでも参加者自身の交流にあると考えており、より使いやすくハードルの低い「場」を提供することによって、自主的に交流が促進されることを意図している。

正 式 名 称	サイエンスコミュニケーションネットワーク横串会 (Yokogushi Network for Science Communication)
コ ン セ プ ト	気軽にあつまり、ゆるくつながる。
目 的	サイエンスコミュニケーションに関心をもつ者が、立場や活動の枠を超えて横断的な交流や情報交換、互学、協働を自主的にできる場や機会を創出する「器」としてサイエンスコミュニケーションを促進する。
設 立	2008年6月1日
会 員 数	104名 (2009年1月10日現在)
運 営 委 員 会	委員16名(2009年1月10日現在) 運営委員として各世話役(代表/副代表/事務局/広報/サーバー・システム管理/地域交流/企画)を設け、会の運営を円滑に行う。
ウェブサイト	http://yokogushi.sc (横串会WEB)
問 合 せ 先	横串会事務局 info@yokogushi.sc

表 1 横串会の概要

2.3.2 横串会への入会について

横串会の入会手順は、まず所定の入会申込み書式に必要事項を記入したEメールを横串会事務局へ送信する。その後、運営委員会での簡単な審査を経て、「横串会SNS」への招待状を兼ねた会員登録の完了通知がされ、会員となる。入会の申込み資格や書式など、入会に関する情報は「横串会WEB」に記載し、誰でもインターネット上で得ることができる。

なお、横串会では会員会費を設けていない。これもまた、サイエンスコミュニケーションに関心をもつ者が気軽に参加できるようにすることを意図している。

2.3.3 横串会の運営方針

横串会の立上げおよび運営に関わる有志もまた、所属や職務にとらわれない、個人の自由意志によって参加している。つまり、横串会は母体に特定の組織をもたない、いわば「独立系」のネットワークということができる。このように、有志ボランティアによって支えられる活動においては、資金面での懸念はもちろんだが、運営活動を継続していくことは精神面からも決してたやすいことではない。志をもって始めたことでも、個人の作業や責任の負担が大きすぎれば、せっかくの志も疲弊してしまひでまいかねない。そこで、横串会では運営委員も各人ができる範囲で気軽に取組むことを運営方針とした。気軽な交流の場を運営する側もまた、無理をせずにゆるく関わることが大切、という考えに基づいている。

しかしながら、運営委員会では主な活動を取りまとめる担当者を設定している。横串会の運営を円滑に行うために必要な世話役（代表、副代表、事務局、Web・広報、サーバー・システム、地域交流、企画）を中心に協働し、会の運営にあたっている。

2.3.4 交流の「器」としての横串会

「横串会SNS」では、横串会会員が日常的に情報交換や互習、交流を行う場として、地域や分野・活動内容を越えて集い、フラットに交流できるウェブコミュニティを目指している。これにより、日常的なコミュニケーションを促進し、サイエンスコミュニケーションに関心をもつ人たちの活動を支援する。また、サイエンスイベント等で横串会の目的に沿った出展や、会員間の交流を促進するためのイベント、地域間の活動をつなぐイベント等を企画実行するほか、横串会の目的に照らして必要と考えられる活動を行うことを目的としている。

特定分野（たとえばサイエンスカフェ）に限定せず、サイエンスコミュニケーションに関心をもつすべての人たちが、横串会という「器」を利用して自由に交流を図り、新たな連携や企画を生み出せる場のひとつとして、横串会が機能するようになることを多くの会員は期待している。

3. 横串会の実践

横串会による交流の場づくりの実践活動は、交流会やイベントの企画と、「横串会SNS」の運営の2つが挙げられる（図2）。各々についてこれまでに行ってきた活動について紹介する。

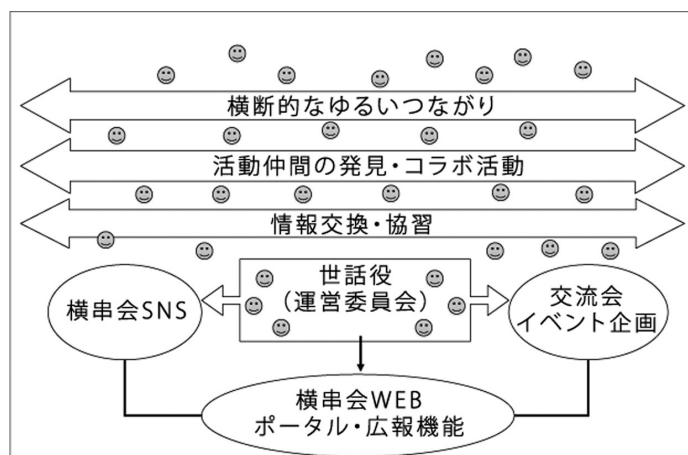


図2 横串会の活動イメージ

3.1 顔をあわせる交流の場づくり

3.1.1 横串フィールド：サイエンスアゴラ2008への参加

横串会の発足となった6月1日の会議で、横串会が初めて企画するイベントとして「サイエンスアゴラ2008」への出展を目標とすることを決定し、運営委員会のイベント・交流会担当者(2名)を中心に企画をすすめることになった。さらに、7月26日に開催した第3回横串会打ち合わせで「お休み処を中心としたサイエンスカフェポスター展示」を企画内容に決定した。

その企画内容は以下のとおりである。

企画名称：横串フィールド

目 的：アゴラ参加者の交流フィールドを設けること

内 容：

サイエンスアゴラ参加者のための「お休み処(フリースペース)」を設ける。

出展されている「主催者」間が交流する場として、また、主な来場者のうち「サイエンスコミュニケーション活動(サイエンスカフェを主体として)」を行っている人たちが、展示だけではなく実際に交流する場としても活用できるフリースペースとする。

展示物として、全国のサイエンスカフェのポスター／自由に活用できる掲示パネル／サイエンスカフェ全国マップなどを掲出する。

本企画において、「サイエンスカフェポスター展」を中心としたのは、「多くの人たちが集い、交流する場を作る」という意図に沿った企画として「サイエンスカフェ」というサイエンスコミュニケーション活動として広く行われているイベントを核としてはどうか考えたことと、本会運営委員である立花がサイエンスカフェを考える会⁵⁾として前年に出品した「サイエンスカフェポスター展2007」を継続し、企画運営の参考とすることで、本会の経験不足を補うことを企図したものである。そして、同様に本会運営委員であるサイエンスポータル⁶⁾・渡辺から共催の提案があり、横串会／サイエンスカフェを考える会／サイエンスポータルの3者での協議の上、サイエンスアゴラへの出展をこの3者の共催とすることを決定した。

3.1.2 横串フィールド：サイエンスカフェポスター展とお休み処の盛況

サイエンスカフェポスター展は、「サイエンスカフェを考える会」および「サイエンスポータル」から参加者を募り、応募要領を事前に送付し、それに沿ってポスターを作製してもらった。ポスター掲示については、事前に担当者まで送付されたものは横串会が貼り出し作業を行い、申し出があれば当日参加者が貼り出すものとした。事前の送付を受け付けたのは、東京周辺以外の地域のサイエンスカフェ運営者が、サイエンスアゴラ会場に来られなくても参加できるようにするためである。

結果としては、18件のポスター出展者があった。そのほかにポスター制作が間に合わないなどの理由があるが参加したいという申し出に対応するため、PDFでの応募を受付、ポスター参加者の開催情報などと合わせ、スライドショーの形式でプロジェクター上映した。

サイエンスカフェポスター展参加者には、サイエンスカフェに関するアンケートを実施した。アンケート内容は一覧表にまとめ、会場で閲覧できるようにした。

サイエンスカフェポスターの説明は、横串会としては行わず、各ポスター出展者の判断に任せた。ポスターセッションの時間を設定することで、会場内での滞留者を多くする時間帯を設けたが、事前の心配は杞憂に終わり、全般に見学者と参加者の交流は確保できた。

会場内に設置したテーブル上にPCを2台常設し、インターネットにつながる無線LANと接続し自由に利用できるようにした。さらに後述する「横串フィールド ネット(β版)」⁷⁾を横串フィール

ドのコンテンツとして開設し、インターネット上で会場の内容を報告することで、会場に来られない会員へのサービス提供を行った。同フロアにはテーブルと椅子が設置され自由に利用できる環境は他に無く、多くの方が「お休み処」として、また打ち合わせ場所として、交流の場に利用することができ、来場者からの好評を博した。

会場での来場者を集計していないため、人数を把握することはできないが、盛況であったことの証として、会場での直接申し込みおよび期間中のEメールでの申し込みを合わせ、30人ほどの新規入会者があった。当会の顔をあわせた交流場づくりに対する反響を得ることができたといえよう。

11月22、23日の2日間のサイエンスアゴラへの出展内容については、サイエンスアゴラ事務局からも注目を集め、最終日の総括講演において、参加団体のひとつとして概要を発表する場を得た。

また、サイエンスアゴラへの参加内容は、NPO法人サイエンス・コミュニケーションのメールマガジンに投稿した(藤田 2008)。サイエンスカフェポスター展参加者へは、横串フィールドの活動について報告書を作成し、送付した。

3.1.3 今後の横串フィールド

横串会では、2009年もサイエンスアゴラへの参加を目指している。参加企画としては、11月23日に開催した臨時運営委員会で、2009年は「横串会会員による活動報告」を中心とすることを決定した。つまり、サイエンスコミュニケーション活動を各地域で展開している横串会会員の活動内容を報告してもらう場として展開する予定である。

3.1.4 横串説明会

横串会では、主にSNSでの情報交換や交流を中心としているが、サイエンスアゴラ以前はSNSの利用度が当初の予測ほど活発ではなかった。その理由として、他のSNSでも指摘されることだが、インターネット上での交流を促進するためには実際に顔を合わせる交流が必要なこと、また、SNSでの情報発信がサイエンスアゴラ向けに進行し、新たな発信がしにくい状況にあったことなどが挙げられる。

さらに、サイエンスアゴラ後に入会した会員の一部に、横串会の活動について「主体的に自主活動をするグループ」であるというような誤解が見られた。

こうした状況を鑑みて、横串会の活動理念について改めて説明する機会を設ける必要を感じた運営委員会では、年末年始に急遽、横串説明会を開催することにした。

東京、大阪、札幌の3ヵ所で説明会と忘年会・新年会をかねて開催され、12月21日に開催した東京が16名、27日に開催した札幌が6名、1月3日に開催した大阪が16名の参加者があった。会員総数に比して、説明会の参加者はまだ多いとは言えず、また参加者から、横串会の理念を改めて理解したという声も聞かれたことから、今後も積極的に説明会を開催していく予定である。

3.2 インターネットの活用

3.2.1 3つのウェブサービス

横串会会員が地域や分野・活動内容を越えて集い、日常的に情報交換や互習、交流を行う場として、インターネット上に横串会独自のSNS「横串会SNS」を構築し、横串会会員に提供することが運営委員会で決定された。

この「横串会SNS」は、「横串会SNS」参加者の紹介によって参加資格が得られる「紹介制」ではなく、横串会会員となった者はすべて、入会と同時にSNSへの参加資格が得られる「登録制」を採用している。

「横串会SNS」はすでに横串会の会員となった者同士の交流の場として機能する「内向き」の情報交流のしくみであるのに対し、横串会から会員以外へ情報発信をする「外向き」のしくみとして「横串会WEB」を別途用意している。

「横串会WEB」は会員以外の人たちに対して横串会に関する情報を提供している。横串会の活動記録を蓄積し外部から参照できるようにし、また横串会への入会手続き等を案内する機能を果たしている。

また、イベント開催時には特設ウェブサイトを開設して、横串会の会員、非会員に関係なく、イベント情報を共有することができるしくみを提供している。サイエンスアゴラ2008においては、横串フィールドのコンテンツの一つとして「横串フィールド ネット (β版)」という特設サイトを開設した。この特設サイトは、希望者は誰でも「特派員」となってサイエンスアゴラの状況をカメラ付き携帯電話から写真付きの記事を逐次投稿でき、一方当日会場に来られない遠隔地の人たちも投稿記事に対してコメントをリアルタイムで書き込むことでサイエンスアゴラ会場の様子を共有できるしくみとなっていた。

3.2.2 運営方法

会費が無料である横串会において、これらのサービスを実現し提供していくためには、金銭的コスト、人的コストを可能な限りかけない形で構築することが必要である。

そのため「横串会SNS」、「横串会WEB」の構築には無料で利用できるオープンソースソフトウェアを利用している。「横串会SNS」はOpenPNE⁸⁾、「横串会WEB」はNucleus⁹⁾で構築、「横串フィールド ネット (β版)」はNucleus上で利用できるプラグインや外部の無料ASPを活用してリアルタイム性を確保した。運営委員有志がボランティアでこれらのソフトウェアを横串会の目的に合うように設定し、現在提供中のサービスを実現している。

また、これらのソフトウェアを動作させるホスティングサーバーも有料のホスティングサービスを使用せず運営委員有志の提供によるサーバーを使用している。このことによって、現在の横串会のすべてのウェブサービスは、実質yokogushi.scのドメイン費用のみで運営されている状況である¹⁰⁾。

3.2.3 各ウェブサービスの活用状況

会員間の交流場としての「横串会SNS」、広報・対外発信としての「横串会WEB」、双方アクセス数は会員数とともに増加傾向である。横串会SNSは月平均10,487アクセス、一日平均一人3アクセス、「横串会WEB」へのアクセスにおいてはサイエンスアゴラ2008を境に、118セッションから238セッション(一日平均)に倍増している。(「横串会SNS」「横串会WEB」共に2008年12月31日時点のデータ)

そして「横串会SNS」内で発信される情報のバリエーションも広がりつつある。サイエンスカフェの運用ノウハウ、イベントの開催周知、関連書籍の紹介、セミナーや講習の聴講記、科学コミュニティのトピックなど、科学技術振興機構(JST)によるサイエンスポータルとはまた違った、サイエンスコミュニケーションに関わる生の情報がタイムリーにアップされている。

また会員と掲載情報の増加に伴い、今まで各組織や地方で孤軍奮闘してきた実践者の悩みや思いも徐々に発信されるようになり、会員間で課題解決に向けてアイデアを出し合うケースもでてきている。

「横串フィールド ネット (β版)」は、会場と遠隔地の間での双方向の交流ができる参加型のしくみとして、会場から情報を投稿するサイエンスアゴラ参加者と遠隔地にいる横串会会員に活用され、好評を博した。会員間のリアルタイムな情報のやりとりは、その後の交流促進へつながっている。時系列で投稿された記事や写真はイベント終了後も参照可能で、貴重な活動記録としてイベントの

反省材料や横串会の説明資料として活用されている。

組織が大きくなればなるほど、ステークホルダーが一同に介して意見交換をする機会をもつことは難しくなる、この点においても「横串会SNS」は有効である。サイエンスアゴラ2008終了後にもすぐにスレッドが立ち上がりイベント後、時間を置かず、出展者、来場者、遠隔地での「横串フィールド・ネット (β版)」視聴者など、様々な立場から感想や改善点が発信・共有された。

現在「横串会SNS」への書き込み自体は月平均40程度であることから、ほとんどがリードオンリーユーザであり、まだ少数の発信者の情報を多数のメンバーが参照している状態である。しかしながら発信に対する新規会員のコメントも増加傾向で、徐々に交流も広がっている。一年に一度のサイエンスアゴラが日常的にネット上に存在している状態であり、雑多な情報が飛び交う「ネット井戸端」として機能している。

なお、「横串会SNS」は会員同士がその交流のために任意に利用するものであり、「横串会SNS」を利用していない会員も2割程いる。こうした状況を踏まえ、運営委員会からのお知らせを随時Eメールで全会員に配信することで、イベントの周知や報告などを補完的に行っている。



図3 横串会WEB、横串会SNS及び横串フィールド・ネット (β版)

3.2.4 今後の展開

「横串会SNS」の目的である、「会員が日常的に情報交換や互習、交流を行う場として、地域や分野・活動内容を越えて集い、フラットに交流できるウェブコミュニティ」は実現されつつある。しかしながら、会員にならないと「中」の様子が見えづらいことから、交流を求めている潜在的な未会員ユーザに対して、「中」の活動状況を紹介していくことも必要であろう。

そのために外向きにインターネット上に用意された「横串WEB」や前述した「横串フィールド・ネット (β版)」のような特設サイトを活用して、会の定期的な状況報告の他、会員の活動報告やイベントレポートを発信し、横串会が「中」に閉じないような仕掛けも用意していきたい。

4. 課題と展望

4.1 横串会が持つ課題とその対策

ここで横串会が持つ課題をまとめよう。これまでの話から明らかになった課題は大きく2点、「横串会の活動理念の周知」と「横串会会員の交流の活性化」である。以下に現状とその対策についてまとめる。

4.1.1 横串会の活動理念の周知

第3章で指摘したように、横串会会員の一部に横串会の理念が伝わっていないケースが見られた。また、そもそも横串会に入会することで何ができるのか、という点が明確でないために入会を躊躇している者もいた。もちろん、まだ「横串会」としての知名度は高いとは言えないが、「横串会WEB」だけでの対外発信では不十分であることが明らかとなった。そこで、横串会はあくまでも「各会員による自主的な交流の場」であることを、会員を含め広く周知するため、横串会会員が直に説明することが必要であるだろう。昨年末には関東、北海道で行ったが、今後は他の地域での開催を検討するなど、横串会の説明会を必要に応じて積極的に開催する必要があると考えられる。まずは少しでも多くのサイエンスコミュニケーションに関心をもつ者が、様々なレベルで情報共有なり意見交換なりができる場として認知してもらうことが必要である。

4.1.2 横串会会員の交流の活性化

横串会会員の主たる交流の場は「横串会SNS」ではあるが、第3章に指摘したように、現状では会員の多くはリードオンリーユーザーである。また、「横串会SNS」を利用していない会員もいる。この状況において、「横串会SNS」上の交流を放置的に会員各自の自主性に任せるだけでは、積極的な交流を望む一部の会員のみ交流に留まってしまう可能性がある。確かにリードオンリーユーザーとして仲間の活動の様子や意見に触れるだけでも「ゆるくつながる」という横串会の理念に適ってはいる。しかし積極的でない層の中には、交流するきっかけが欲しい人や、相手の顔が見えない場では発言しにくいという人がある。そのような会員に少しでも横串会という器が利用しやすくなるような、交流の「きっかけ」を、運営委員側が用意する必要があると我々は考えている。その上で、積極的に交流するかしないかは各々の会員次第であり、必ずしも積極的な交流を強いるものではない。

交流のきっかけを生み出す策としては、例えば横串会運営委員が「横串会SNS」上で積極的に関与することが考えられる。また、なかなか顔を合わせることもない会員同士が、お互いの人となりを知る機会を設けることも考えられる。サイエンスコミュニケーションに関してどのような関心を持ち、どのような活動を行っているかを会員同士が知ることが、「横串会SNS」上での発言や意見交換など、会員間の交流につながると期待できる。この点に関しては、第3章で指摘したように、直に交流できる場を設けると共に、横串会会員の活動報告を行うイベントを（インターネット上も含め）開催するなど、横串会内外に発信していくことを検討する必要がある。

4.2 今後の展望

近年、日本では科学技術と社会との対話の重要性が指摘（文部科学省、2004）されて以来、サイエンスコミュニケーション活動は急激に注目され、様々な形で繰り広げられている¹¹⁾。そのような実践知がサイエンスコミュニケーションに関心を持つ者たちに広く共有されることは、一般社会で科学技術の情報を共有する活動を行うためのツールを得る上では重要である。その上で、新たな実践活動が生まれることも十分期待される。その点で、日本全国のサイエンスコミュニケーションに関心を持つ者同士がゆるいつながりを持つことができる横串会は非常に有益な場の一つであるだろう。

また、科学技術やサイエンスコミュニケーションを通じた地域活性化の試みの報告（朝野 2008）や、地域連携によるサイエンスコミュニケーションの必要性の指摘（松田 2008）、国全体でのサイエンスコミュニケーションを活性化するためには地域での取り組みが大切であるという指摘（清水他 2007）などがある。これまでも、青少年のための科学の祭典¹²⁾が1992年から毎年各地域で開催されている。近年ではJSTによる地域科学技術理解増進活動推進事業¹³⁾など、「地域」という言葉はサイエンスコミュニケーションにおいて一つのキーワードと言ってもいいのではないだろうか¹⁴⁾。

その点で言えば、横串会支部など、各地域での活動拠点が自然発生的に生まれれば、その地域における、サイエンスコミュニケーションに関心を持つ者を含む様々なアクターのつながりを密にできると我々は考える。これは一見「地域を越えたつながり」という横串会の活動理念と矛盾しているように思われるだろう。しかし、実際にサイエンスコミュニケーションの実践活動を行うときの単位の多くは地域である。その地域における様々な団体のつながりによって生まれた新たな活動を、その地域で閉ざしてしまうのではなくその活動内容を発信することが、「地域の垣根を越えたつながり」へと発展するのではないだろうか。そのつながりを作ることが可能であるのが横串会という器だと我々は考えている。

ところで、このような全国的ネットワークとしては、科学技術広報研究会¹⁵⁾が既に存在している。今後こうしたネットワークとの情報共有や連携など、お互いに有益な範囲で関わることができると非常に効果的だろう。

大きな器の中には各々が作った料理がたくさん盛られている。お互いにその料理を吟味しながら、気になる料理のレシピを聞いてみて、挑戦してみる。また、息が合えば複数人で協力して新たな料理を作ってみる。そのようにして作られた料理がまた器に盛られる。ちょうど横串会という「器」ではこのようなことが今後起こっていくのではないだろうか。サイエンスコミュニケーションに関わる、各々にネットワークを持つもの同士がつながり、そしてその結果、新たなつながりが様々に生まれる。横串会という「器」には人的ネットワーク、そして実践知が蓄積されていくと考えられる。目に見える成果はすぐには得られないかもしれないが、例えば横串会を通して、新たな活動が生まれることがあれば、我々としては非常に喜ばしい成果の一つといえるだろう。

5. おわりに

横串会運営委員16名のうち、もともと面識があったのは、平均してひとり4.3名(約25%)である。多くがここで初めて出会い、横串会の運営というコラボレーションをはじめたことになる。新たな活動や団体は既知の関係において生まれるケースが多いが、横串会は気軽にゆるい交流の場をつくらうとの目的のもとに見知らぬ有志が集まり、設立・運営されている。

横串会は動き出してから1年足らずの若い試みである。これがサイエンスコミュニケーションのムーブメントに乗じた一過性のものではなく、恒常的な会として安定してサイエンスコミュニケーションに関心をもつ者が気軽に集い、ゆるくつながることができる場となるよう、我々もまた「気軽に」しかし真剣に横串会の運営に取り組んでいきたい。

なお尚、本稿はそれぞれの共著者が担当章を執筆し、協働して全体の推敲を行い完成させたものである。

謝辞

横串会運営委員の中には、国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座、東京大学科学技術インタープリター養成プログラム、北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニットなどの講座に学び、自主的にサイエンスコミュニケーションにかかわることを目指した有志が複数いる。これら講座の存在は横串会にとって大きい。サイエンスコミュニケーションの人材養成を行うすべての機関に、この場を借りて感謝を申し上げたい。また、横串会の立上げ及び運営にあたり貴重なご意見、激励をお寄せくださった皆様に、心より御礼申し上げる。

注

- 1) 例えばCoSTEP2007年度の講義の中で、南波直樹氏も横断的ネットワークの必要性を指摘している。
- 2) 横串会の立上げに参加した有志には、サイエンスアゴラ2006での出展企画に関与し、この活動が今回の横串会の立上げに関わるようになった、直接的な動機となっている者や、あるいはサイエンスコミュニケーションが行われている主な活動地域から距離的に遠いなどの理由などにより、コミュニケーション活動が困難な人たちであっても関与できる、インターネット上でのオンラインとフェース・トゥ・フェースのオフラインの両面からサポートする、フレンドリーなコミュニティがぜひとも欲しい、という切実な思いを抱いていた者、コミュニケーター養成講座修了後も自主的な学びを望む者、他の講座や所属の仲間との情報交換を目的とする者、サイエンスコミュニケーションの活動に関与する機会として参加する者など、横串会への参加動機や目的も様々である。
- 3) 横串会WEB <http://yokogushi.sc>
- 4) 横串会SNS <http://yokogushi.sc/openpne>
- 5) サイエンスカフェを考える会 <http://scicafe.exblog.jp/>
- 6) サイエンスポータル <http://scienceportal.jp/>
- 7) 横串フィールド ネット (β版) <http://yokogushi.sc/nucleus/field.php>
- 8) OPEN PNEは株式会社手嶋屋が中心となって開発したオープンソースのSNSエンジンである。
<http://www.openpne.jp/>
- 9) NucleusはCMS (コンテンツ・マネジメント・システム) フリーウェアである。
<http://www.nucleuscms.org/>
- 10) 横串フィールド、横串説明会において運営費支援カンパを募った結果、現金では合計10654円の支援が寄せられた。
- 11) 第3期科学技術基本計画に、研究者と国民との間における双方向コミュニケーションの重要性とともに、国民の科学技術への主体的参加を促す必要性に関する記述があり、また、従来の普及活動に加えた、多様な活動が必要とされている。特に現在注目されているのは、対話型や市民参加型の活動である (藤垣他 2008, 小林 2007, 中村 2008)。
- 12) 「青少年のための科学の祭典」は財団法人日本科学技術振興財団主催の、理科や数学、科学技術などの分野の実験や工作を楽しむイベント。 <http://www.kagakunosaiten.jp/>
- 13) 「地域科学技術理解増進活動推進事業」では、地域における科学技術の興味・関心を深める活動の支援を行う (http://rikai.jst.go.jp/zoshin/about/about_chiiki.php)。この前身として地域科学館連携支援事業 (<http://rikai.jst.go.jp/chiiki/top.htm>) も2001年度から2006年度まで行われていた。
- 14) 昨年開催されたサイエンスアゴラ2008では、「地域」をキーワードにしたプログラムも開催されていた (<http://scienceportal.jp/scienceagora/agora2008/>)。また、2009年8月22日から30日にかけて、「はこだて国際科学祭」 (<http://www.sciencefestival.jp/>) という函館市民による市民のための科学の祭典や、同年9月12日から27日にかけて、「東京国際科学フェスティバル」 (<http://tokyo.sci-fest.net/>) という地域社会が科学を通じて地域の絆を形成する仕掛けを創出することを目的とした科学の祭典が開催されることが決定している。
- 15) 科学技術広報研究会 (<http://jacst.kek.jp/index.html>) は、様々な研究機関や大学などに所属する広報担当者間のネットワークであり、2007年に設立されている。

●文献

- 朝野裕一 2008:「あさひかわサイエンス・カフェを立ち上げて」,『科学技術コミュニケーション』第3号, 129-136
- 石村源生 2008:「研究機関の広報支援のためのワークショップ」の企画実施,『科学技術コミュニケーション』第3号, 137-148
- 藤垣裕子・廣野喜幸[編] 2008:『科学コミュニケーション論』東京大学出版会, 239-251
- 藤田剛 2008:「サイエンスアゴラを振り返って」,『SciCom News』No.270 2008年12月1日号 巻頭言
- 小林傳司 2007:『トランスサイエンスの時代』NTT出版, 57-93
- 長神風二 2007:「サイエンスにおけるより大きなつながりに向けて:サイエンスアゴラ2006実施総括」『科学技術コミュニケーション』第1号, 14-24
- 松田健太郎 2008:「日本のサイエンスカフェをみる～サイエンスアゴラ2007でのサイエンスカフェポスター展・ワークショップから～」『科学技術コミュニケーション』第3号, 3-15
- 文部科学省 2004:『平成16年版 科学技術白書:これからの科学技術と社会』88-133, 国立印刷局
- 中村征樹 2008:「サイエンスカフェー現状と課題」『科学技術社会論研究』第5号, 31-43
- 清水麻記, 今井寛, 渡辺政隆, 佐藤真輔 2007:「科学館・博物館の特色ある取り組みに関する調査—大人の興味や地元意識に訴える展示及びプログラム—」調査資料141, 文部科学省科学技術政策研究所
<http://www.nistep.go.jp/achiev/ftx/jpn/mat141j/pdf/mat141j.pdf>
- 立花浩司 2007:「『サイエンスアゴラ2006』開かれる」『バイオニクス』27, 18-19
- 立花浩司 2008:「科学コミュニケーションの関心者をつなぐ「器」をつくる試み」,『SciCom News』No.237 2008年4月21日号Editorial